



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3286 号 2016.9.30 発行

「あくまでしつけだった」 発達障害の2歳長男を収納ケースに閉じ込め死なせた父、悲劇は防げなかったのか 産経新聞 2016年9月29日
 子煩悩な父親だったというが…事件が起きた奈良県生駒市の自宅マンションを家宅捜索し、押収物を運び出す捜査員ら



『ごめんなさい』のポーズをするので、しつけとして効果があると思っていた」ー。奈良県生駒市で4月、長男＝当時（2）＝と長女（4）をプラスチックの収納ケースに閉じ込めて長男を死亡させたとして、会社員の父親（40）が監禁致死罪などに問われた事件。奈良地裁で9月にあった裁判員裁判で、父親は懲役3年の実刑判

決を言い渡された。あくまでも「しつけ」だったという父親は公判で、「今となっては浅はかだった」と涙ながらに悔やんだ。子煩悩と評判だった父親はなぜ、残酷な犯行に及んだのか。背景には、子供の発育に悩み、相談しても解決の糸口すら見いだせなかった苦悩があった。

発端は「リビングのテレビをたたいた」こと

公判で明らかになった事件の詳細はこうだ。

4月10日夕、2人の子供は自宅のリビングでテレビを見るなどして遊んでいた。両親ら家族4人で買い物に出かけ、帰宅した後だった。

2人がテレビを間近で見いていたため、台所で夕食の準備をしていた母親（36）が「テレビを近くで見すぎたらダメ」と注意した。しかし2人は言うことを聞かず、テレビにかじりついたまま。しばらくすると、別室で仕事をしていた父親の耳に、「パシャーン」という大きな音が聞こえた。

父親がリビングに駆けつけると、2人の子供はおもちゃでテレビをたたいていた。「ガラスが割れたら危ないだろ!」。2人の頭に「ゲンコツ」をしたが、テレビをたたくしぐさをやめない。「こういうことをもう2度とさせないようにしないと」と考えた父親は2人を和室に連れて行き、プラスチックの収納ケースに長男、長女の順に入れてふたをし、ロックをかけた。

時刻は午後5時45分ごろ。台所で食事の支度中だった母親は状況を把握していたが、「前にもあったから大丈夫だと思っていた」という。

約20分後の6時6分ごろ。父親がロックを外すと、長女はふたを押し上げて自力でケースを出て、両手を合わせて「ごめんなさい」のポーズをしてみせた。ところが、長男はぐったりしたまま。あわてた父親が110番し、長男は病院に搬送されたが、約7時間後に窒息による低酸素脳症で死亡。翌日、父親は殺人容疑で奈良県警に逮捕された。

しつけは「痛みや恐怖」で

2人が閉じ込められた収納ケースは昨年8月、子供たちの「おもちゃ箱」用に購入したものだった。

グレー色で、外から中は見えない。大きさは幅約53センチ、奥行き約35センチ、深

さ約33・5センチ。長女は身長約96センチで体重16キロ。中にはCDやおもちゃも入っており、身長約90センチだった長男をうつぶせに入れた上に長女を重ねればほぼ隙間がなく、2人は身動きがとれない状態だった。

閉じ込めてしばらくは、子供たちの泣き声が聞こえたという。だが、10分ほどたつと長男の声はしなくなった。それでもなお10分間、父親が2人を閉じ込めていたのは、この行為が昨年9月ごろから、20回以上繰り返されていた「いつも通り」の“しつけ”だったからだ。

実は、両親はずいぶん前から2人の子供の発育に悩み、痛みや恐怖を与えることで「言うことを聞かせていた」という。

1歳6カ月検診で「発達の遅れ」指摘、「言葉が通じない…」

「言葉で注意してもきかない場合は軽くたたいたり、親と離れて寂しい思いをするよう寝室に閉じ込めたり、洗濯かごを組み合わせて閉じ込めたりした」

公判で、母親はこれまでの“しつけ”をこう語った。さまざまな手法で「懲らしめた」末、「1番強いしかり方」として昨年9月から始めたのが、収納ケースに閉じ込めることだった。

2人はいずれも「1歳6カ月検診」で発達の遅れを指摘されていた。特に言語面での遅れが顕著で、「おは」や「ばいばい」などの簡単な単語しか話せなかったという。

しかも、車の前に飛び出したり、閉じ込めた寝室で出窓に飛び乗って遊んだり、窓から半分身を乗り出したりと、危険な行動をとることがあった。そんな2人に対し、両親は「ダメ」「危ないでしょ」としかかったが、言うことをきかない。「言葉では通じない」と思った母親は、「どうしてもやめてほしいことは、軽くたたいたりして伝えた」。

すがる思いで市にも相談したが、窓口で担当者から聞いたアドバイスは「見守ってください」だった。

「それでは危険から救うことは難しかった。言葉が通じなかったから」。証言台でこう苦悩を語った母親。薄いグレーの長袖シャツと黒色ズボンという地味な服装で、髪を一つに束ね、疲れ切った様子だった。

子煩悩で穏やかな人が…

日常的に幼子をプラスチックの収納ケースに閉じ込めるという“しつけ”を繰り返していた両親。だが、周囲の評判などからは、子供を大切にしていた「幸せそうな家族」像が浮かぶ。

父親は、建設業の父と専業主婦の母、姉の4人家族の長男として育ち、米ニューヨークの大学への留学などを経て、大阪の市場調査会社に就職。約4年半前に結婚し、すぐに長女が誕生、続いて長男が生まれた。

知人によると、パソコンの分野に強く、社内のセキュリティ関係を一任されていた。性格的には、「超が付くほどまじめで、穏やかな人」。福井県立恐竜博物館を訪問した昨夏の家族旅行について、「子供たちが大はしゃぎでした」と楽しそうに打ち明ける「子煩悩な人だった」という。

母親も「毎日の子供の歯磨きや、時間があれば入浴もやってくれた。休みの日は、食事以外（の家事）はほとんどやってくれていた」と、家庭的であったことを証言。仕事でも、母親が子供の様子をメールで送るなど、子育てには深くかかわっていたという。

「危険とは考えなかった」

「愛情を持って接するのが子育ての基本方針。注意しても、ちゃんと理解してくれていないことも多かった。何とかわからせないといけない思いが強かった」

父親は公判でこう語った。子供を殴ったりけったりするのは「虐待」と認識していたが、約20回もケースに閉じ込めた行為については「異常がなかったので、危険とは考えなかった」という。

だが、「長男が苦しいと感じることはない、本当に思っていたのか」などと繰り返し尋ねられると、「『ごめんなさい』のポーズをするかばかり見ていたので。もうちょっと細か

く子供の表情を見ていたら、ケースに閉じ込めることはなかったと思う」と涙ながらに答えた。

専門的なアドバイスは

子供の発育に悩む親は多い。専門的な治療やアドバイスを欲している家庭も多いはずだ。

発達障害の子供の診察や支援を行う「東大寺福祉療育病院」（奈良市）では、両親への支援として「ペアレントトレーニング（PT）」を実施。米カリフォルニア大学ロサンゼルス校のプログラムを日本風にアレンジしたものといい、同院では3年前に導入。これまで約30家族が実践してきた。

PTは2週間に1回のペースで全10回。5家族ほどのグループ形式で「講義」を受けた後、悩みや意見を出し合い、共に適切な対応を考えるという。

最も多い悩みは、「接し方がわからない」。担当する小児科専門医（50）によると、発達障害の子供の場合、「危ない」と言われても危険性を認識できなかったり、「〇〇をやめなさい」と言われてもどうすればよいのかわからなかったりするため、それぞれに合わせた「環境調整」が必要で、「子供の特性を理解し、適切な療育を行うことで生活の質を向上させ、自信を得られるようになる」という。

PTで親に毎回出す“宿題”の一つは、「子供の良いところ探し」。最初は困惑する親も次第に「こんな優しいところがあった」と変化し、修了した際に表彰状を授与すると、「子供に自慢できる」と笑顔を見せる母親もいるという。

専門医は「正しい療育が行われれば、発達障害をもっていても社会的に自立できる」と話した。

週5日センター通いも「悩み打ち明けられず」

今回の事件で奈良地裁は9月15日、「身体拘束の程度が非常に強く、常識的に考えて死亡の結果が生じるのは容易に分かる。ほかに危険性のない適切な手段を容易に取り得た」などとして、父親に懲役3年（求刑懲役5年）の実刑判決を言い渡した。

発育に問題を抱える子供のしつけに悩んだ末の悲劇。防ぐ手立てはなかったのだろうか。関係者によると、長男とともに閉じ込められた長女は週5日間、母親に連れられて県内の「児童発達支援センター」に通っていた。だが、母親が悩みを打ち明けられるような友人はいなかったという。（山崎成葉）



人の長所どう伸ばす 教育法「褒め結び」解説 大阪日日新聞 2016年9月29日

人の長所を将来必要な力と結び付けながら伸ばす教育法「褒め結び」のポイントを漫画で紹介した企画展が大阪市旭区高殿4丁目の喫茶店アップルで開かれている。実践方法や取り組みの意義を解説。関係者らは「親しみやすい漫画をきっかけに、主体的に生きる人の育て方を知ってもらえれば」と思いを込めている。10月末まで。

「褒め結び」の手法を解説した本の漫画を原画で展示した企画展

展示しているのは、本紙の加星宙磨記者と公立小学校の榑木厚教諭の共著『マンガでわかる！あなたと日本の未来を変える教育法「褒め結び」』で使った表紙と原画4ページ分。人の育て方に悩むキャラクターが「褒め結び」について理解を深める様子を笑いの要素も交えながら描いている。

作中では、今の社会は「褒められたい人」の数に対して「褒める人」が不足している点を指摘。褒められる体験が十分に足りていない人の状況は、ロケットが完成していても、行動を起こすために必要な「燃料」が用意でき



ていない状態だと説く。

実践の紹介では、以前の状態と現状を比較して伸びた点を褒め、褒めた点と将来役立つ力の結び付け方を説明。「片付けができる」は「あらゆる組織で重宝される自己管理能力の向上」といった形だ。「結び付けを確認していく作業が人を前向きにする」と位置付けている。

開場時間は午前11時～午後2時。不定休。問い合わせは携帯電話080（9745）5500、アップル。

障害者ら緊急討論会 誰もが大切な社会へ 相模原殺傷



神奈川新聞 2016年09月29日
自らの経験や共生社会への思いを語る三宅さん（手前）たち参加者＝28日、参院議員会館

相模原の障害者施設殺傷事件を受けた緊急討論会が28日、参院議員会館で行われた。マイクを握った障害者や家族、支援団体は「障害者を知ってもらいたいから顔も名前も出して話す」と差別や偏見のない共生社会への願いを込めた。

10人の登壇者の1人、横浜市のグループホームで暮らし、地域作業所で

豆腐づくりに励む三宅浩子さん（46）は、自身の知的障害に触れながら「殺された人たちにも、きっと目標や楽しみがあった。こんな人がいたと知ってもらうため、私はきょうここに立っている」と語った。

重度の心身障害がある長女（44）の母、埼玉県川口市の新井たかねさん（70）は事件の背景に浮かぶ優生思想に向き合う日々を振り返った。長女の障害を受け入れるまで「簡単ではない道のりがあった」といい、「大切な出会いや学ぶ機会に恵まれ優生思想的な考えを克服してきた」。自身の歩みに誰もが尊重される社会の実現への道のりを重ね合わせた。

県の事件検証委員会の委員長を務める東洋英和女学院大の石渡和実教授は「障害者が夢や希望を持てる社会の実現のため当事者の思い、考えを大事にしていきたい」と力を込めた。

討論会はNPO法人日本障害者協議会（藤井克徳代表）の主催で300人が参加。「今回の事件をすべての人が大切にされる社会をつくるための新たなきっかけにしたい」とするアピールを採択した。

相模原事件を考える 障害者ら300人集う 今の社会に温床が共生へ次の一歩を

しんぶん赤旗 2016年9月29日
フロア発言も行われた討論集会＝28日、参院議員会館

相模原市で起きた障害者殺傷事件から2カ月が過ぎ、事件とその背景にある問題を深め合おうと、障害のある人ら300人余りが28日、国会内で討論集会を開きました。12人の障害のある人、家族、関係者が発言しました。主催は、日本障害者協議会（JD・藤井克徳代表）。

国会内で討論集会

集会の冒頭、亡くなった19人に思いを寄せ、黙とうしました。



藤井代表は、同事件の容疑者が障害者を不要とする優生思想的な考え方があったことにふれ、「こうした考え方は、生産性や効率性が求められる今の社会の側に温床、遠因があったのではないかと指摘。国連・障害者権利条約8条が障害者に対する偏見や有害な慣行とたたかうことを規定しているとして「自分の中に潜む差別意識とたたかうことが必要だ」と強調しました。

肢体障害のあるJD理事の太田修平さんは、延命治療を施さない選択ができる「尊厳死法案」をめぐる国会の動きや出生前診断にふれ、「『障害がない方がいい』と思うのは容疑者だけだろうか」と問いかけました。

神奈川県手をつなぐ育成会の依田雍子（ちかこ）会長は「共生社会に向けて次の一步を踏み出さなければ」と述べました。

全国精神保健福祉会連合会の小幡恭弘事務局長は、容疑者の措置入院歴によって偏見が助長されることなく精神障害のある人が市民として扱われる社会を求めました。

さいたま市内で作業所やグループホームを運営する鴻沼福祉会の斎藤なを子常務理事は、現行の障害福祉制度の成果主義に基づく報酬の仕組みが障害者を軽んじることに繋がると指摘。障害者の尊厳を守る視点での制度拡充の必要性を訴えました。

菌部英夫副代表は閉会あいさつで、「社会が“いらぬ人”をつくり殺したら、次は別の“いらぬ人”が殺されてしまうだろう。すべての人が安心して生きられる社会のあり方を考えよう」と呼びかけました。

日本共産党の田村智子副委員長・参院議員と畑野君枝衆院議員が参加、田村氏があいさつ。民進党国会議員も参加しました。

要望のある場合に合理的配慮 障害学生の修学支援で 教育新聞 2016年9月28日

第二次まとめ(原案)について議論された



障害のある学生の修学支援に関する検討会の第6回会合が9月28日、文科省で開かれた。事務局は第二次まとめの原案を提示。「合理的配慮の内容の決定の手順について」を詳細に記述。他にも、平成29年度の概算要求の説明が行われた。

同まとめ原案では、合理的配慮について、障害学生から要望があった場合に行うとされた。ただし、明らかな必要性を感じた場合は、要望がなくても、学生のニーズに応じた適切な配慮を行うのが望ましいと記述されている。

要望を出す際には「原則として、学生から障害に関する根拠資料の提出があることが必要」とされた。提出困難の場合は、必要に応じて建設的対話を行っていく意向を示した。

この「根拠資料」について委員からは「そうした資料となるのは、医学的なものだけだと受け取られてしまう可能性がある。幅広い資料を求めるような記述が必要ではないか」との意見が出た。

合理的配慮の内容決定手順は、①障害学生からの要望②障害学生と大学等による建設的対話③内容決定の際の留意事項(教育内容等の確認・提供方法の変更)④決定された内容のモニタリング⑤決定された内容に不服がある場合の第三者組織での調整——とされた。

これらの手順は一方向のものではなく、障害状況の変化や建設的対話等を踏まえ、その都度くり返されるものだという。

他にも「障害者差別解消法を踏まえた『不当な差別的扱い』や『合理的配慮』に関する考え方」やまとめに至った経緯、大学等での障害学生の現状なども明記される。

一方、事務局からは平成29年度の概算要求として「社会で活躍する障害学生支援センター

形成事業(仮称)」と題された事業内容の説明がされた。

全国を9ブロックに分け、各ブロックに「社会で活躍する障害学生支援センター」を形成。同センターが中核となり、障害学生支援の地域全体での取り組みの充実を図るのを目指す。概算要求額は5億円。

平成22年から27年までの5年間で、障害学生が8810人から2万1721人と約2.5倍に増加したほか、今年4月に施行された「障害者差別解消法」などが背景となっている。

障害者施設にたい焼き店 利用者が接客、地域結ぶ 静岡 静岡新聞 2016年9月29日
焼き上がったたい焼きを運び、接客する施設利用者(左)＝静岡市清水区大坪の「ひだまり あん」



静岡市清水区大坪の障害者就労支援施設「テラス・ひだまり」が新たに取り組むたい焼き店「ひだまり あん」の内覧会が28日、開かれた。10月1日にオープンする。

同区吉川から移転新築した2階建ての作業所の1階部分に「施設利用者が力を合わせて楽しく働くことのできる場」として店舗を設けた。焼く作業はスタッフが行うが、材料の下ごしらえや接客を施設利用者が担う。地元の特別支援学校生の作品を展示・販売する雑貨コーナーも設けた。

販売する商品は、粒あんのほか、施設の仲間が手作りしたみそを皮に練り込んだみそたい焼き、地元の茶葉を使ったお茶たい焼きの3種類(価格は120～150円)がメイン。「パリっとした皮にこだわった」という。

施設を運営するNPO法人たからじまの指導員寺畑泰宏さんは「たい焼きを扱う就労支援施設は珍しい。福祉と地域をおいしさで結ぶことのできる店になれば」と語った。

1日午前10時からオープン記念イベントを行う。通常の営業は、平日午前10時半から午後4時まで。問い合わせはひだまり あん<電054(368)4670>へ。

「認知症を身近に」 学生らが紙芝居 日本福祉大 豊平森

朝日新聞 2016年9月29日



認知症啓発の紙芝居を持つ(左から)福田萌子さん、磯村亜美さん、斉藤雅茂准教授、織田あさひさん、加藤美咲さん



ん＝美浜町奥田の日本福祉大

認知症の症状と対処法を広く知ってもらおうと、日本福祉大(愛知県美浜町)の学生たちが子ども向けに紙芝居を作った。長期的な視野で認知症と共生する社会を目指す活動で、「要望があれば出向いて、子どもたちに紙芝居を見て欲しい」と張り切っている。

制作したのは、社会福祉学部2年の加藤美咲さん(20)、織田(おりた)あさひさん(20)、福田萌子さん(19)、磯村亜美さん(20)の4人。地域の課題解決を考える科目「地域研究プロジェクト」を履修して認知症の啓発活動に取り組む中で、紙芝居作りを思いついた。

題は「ぼくのおじいちゃん どうしたの?」。約5分で男の子とおじいちゃんの日常のやりとりを描く。おじいちゃんにはキャッチボールの約束を忘れてたり、夏に冬物の服を着込ん

だり、食事したことを直後に忘れてたり。おかしい様子を見せ始めた時にどう対応するべきかを、クイズを交え、行動を否定せずに優しく接する方法を分かりやすく伝える工夫をしている。

4人はそれぞれ、身内の方が認知症になったり、その疑いのある症状を示したりした経験があり、この問題に関心を持った。脚本担当の織田さんは「みんなで認知症について調べた結果を踏まえて物語にした。分かりやすいように、あえて、認知症という言葉は使わなかった」。加藤さんは「子どもだましではなく、大人にも理解してもらえる内容」と話す。

指導する齊藤雅茂准教授（社会福祉学）は「禁煙の啓発も何十年もかかって進んできた。認知症も30年で考えると、子どもを対象にすることには重要な意味がある」と指摘する。

学生らにアドバイスした「認知症の人と家族の会」県支部の尾之内直美代表（58）は、紙芝居を「分かりやすく、参加型のいい作品ができた」と評価。「子どもは自然に受け入れられ、認知症への垣根が低くなる。将来、介護する時にも役立つし、初期症状も見つけやすくなる」と話す。

学生らは今月11日、アピタ東海荒尾店（東海市）での認知症イベントで紙芝居を初披露。子どもと一緒に大人も足を止めて作品に見入った。店を運営するユニーは認知症の人にも買い物を楽しんでもらおうと、社員教育のほか、地域や行政などと連携した啓発活動も展開し、学生の活動にも協力してきた。

足を失っても歌ったアイドル 残した言葉メンバー励ます 芳垣文子



朝日新聞 2016年9月28日
いすに座り、「花やしき少女歌劇団」のメンバーとのステージで歌う木村唯さん（2015年6月28日、ファンの久保裕昭さん提供）

昨年10月、18歳のアイドルが小児がんで亡くなった。東京・浅草の「花やしき少女歌劇団」の一員として歌手をめざしていた。右足の切断手術を受けたが、ステージではいすに座って歌った。少女が旅立ってから1年。死を前に残したさまざまな言葉が、1



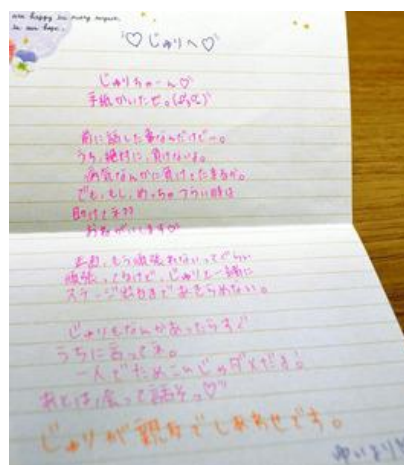
0月から新しいステージに立つメンバーを励ましている。

9月25日、東京・浅草の老舗遊園地「浅草花やしき」内の小さなステージ。ここを拠点に活動する「花やしき少女歌劇団」（団員数32人）のメンバーが踊っていた。

「唯ちゃん、きっと見に来てるね」。後輩のステージを見に来た元メンバーの少女たちが話した。かつてこの輪の中心にいた木村唯さんの一周忌が、まもなく訪れる。

唯さんは小3で入団。中3の夏、足の痛みに襲われた。「横紋筋肉腫」というがんで、抗がん剤治療に耐え、高1の夏に右足の切断手術を受けた。生きる可能性を探り、ステージに戻るための決断だった。唯さんは入院中、母雅美さん（43）に「私を可哀想だと思わないで。私は十分幸せだから」と話し、ベッドの上でショーの動画を見ていたという。

手術から約5カ月後、ステージに戻った。片足を失った唯さんは観客が不快にならない



か、歌劇団の小さな子が怖がらないか気にしていた。だが、無用な心配だった。一番仲良かったメンバーの大橋妃菜（ひな）さん（16）は「みんな『おかえり』っていう感じだった」。ファンも手製のうちわを振って迎えた。

金井啓子の現代進行形 怒る対象を間違えていないか 大阪日日新聞 2016年9月29日 理不尽ないら立ちぶつける不毛さ

いつものように大学に向かおうと近鉄奈良線に乗っていた先週半ば。朝早くには通勤や通学の乗客で混み合うが、その日は遅めの出勤だったので、私が乗っていた先頭車両はすいていた。やがて、河内小阪駅の直前になって電車はゆっくりと停車した。なんだろうとっていると「河内小阪駅で人身事故が発生しました」という車内アナウンス。あの停車ぶりから私が乗っている電車が人をはねたはずはないと考えていたところ、反対側のホームに到着する直前に停車している車両が遠くに見えた。

誰かがケガをしているか悪くすれば亡くなっている可能性があるのだと考えると、席を立てて現場を見ようという気にはなれなかった。だが、私が乗っている電車の車内では、またたく間に5～6人の男女が2両目以降の車両から先頭車両に歩いてきた。グループ連れが怖いもの見たさでにぎやかに来るのならば不謹慎とはいえまだわかる。だが、それぞれがひとりで電車に乗っていた様子で、運転席がのぞける窓のところにへばりつくようにして、遠くに見える事故現場をだまっけと見つめている。いろいろな人がいるものだ。どんな気持ちなのだろう。そう思いつつ彼らの背中を眺めながら電車が発車するのを待っていた。

運転が再開されてしばらくたって、高齢の女性が線路に入り込んで電車にはねられて死亡する事故だったことをニュースで知った。と同時に、もうひとついやなニュースを目にしてしまった。その事故の影響で電車が運行中止したために、東花園駅で客から詰め寄られていた車掌が突然、制帽と制服の上着を脱ぎ捨ててホームから下り、線路上を走った後に高架から飛び降りて、腰と胸の骨を折ったのだという。

電車が止まって用事に間に合わなくなるかもしれないと思えば、誰だって焦る。だが、乗客が車掌に怒ることほど無意味かつ理不尽なことはない。近鉄は「車掌が不適切な行動を起こしたことは遺憾で、心よりお詫びします」とのコメントを出した。車掌の職場であるはずのホームから客を置いて逃げ出したことは確かに「不適切」かも知れない。でも、あまりにむちゃな要求を突きつけられた末に起きてしまったと思われるこの出来事に、車掌を一方向的に責める気持ちには到底なれない。

そういえば、つい最近もファストフード店に私がいると、ほんの1分程度待たされた男性客が、複数あるレジのうちひとつしか開けていないことを店員に向かって大声でののしった上で、何も買わずに娘らしき小さい女の子を連れて立ち去った。その時は、店員だけでなく、女の子までなんだかかわいそうになってしまった。

人々は他人の不幸をそれほど見たいのだろうか。そして、彼らは何にそんなにイライラしているのだろうか。怒る時は、怒るべき相手を選んできちんと怒る。それほど難しいことではないはずだ。（近畿大学総合社会学部准教授）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

